

研究室だより

55



東洋学園大学



四年ぶりに完全対面で実現した学園祭

一 目 次

1. 中国長期留学の奨学金について……………	2
「中国政府奨学金留学」「国際中国語教師奨学金留学」「孔子学院奨学金留学」を中心に	
	成 寅
2. グローバル・コミュニケーション学部の長期展望と言う一考察……………	8
	対 馬 宏
3. 電子辞書のすすめ……………	12
	松 本 純 一

※1は冊子でのみ公開しています。
PDFではご覧いただけませんので、ご了承ください。

グローバル・コミュニケーション学部の長期展望と言う一考察

対馬 宏

長期的観点から本学本学部の行く末を見るときと

1926 年開学、東洋学園はあと 2 年で 100 周年を迎える。四年制大学が発足して 32 年経っているが、国際化に対応する人文学部英米言語、英米地域学科から始まり、その後身となるグローバル・コミュニケーション学部には在籍する身として、さらにあと数十年、長期の視点を持って考えてみたい。

2023 年 4 月国立社会保障・人口問題研究所からの将来人口推計が出された。それによると、日本人人口の減少とも相まって外国人人口比率は 2060 年代に 10% を超えることになる。国際化、あるいは、グローバル化という観点から私はここに注目すべきだと思っている。いわゆる内なるグローバル化である。本稿では、国際交流の実像、キャンパスを活用した人的交流について触れていきたい。

グローバルというのとにかく外に行くという考え方に注目が集まる。実体験重視である。ただ、上に挙げた数字を見ても、国内での人的交流が重要となってくることはほぼ間違いない。そこまで見据えた学びについて見ていきたい。2060 年代と言えば、今いる在学生が 60 歳前後となる。その頃のことまでは何とか考えられるであろう。振り返ったときに、二十歳の頃に学んだことが役に立ってきたなと思ってもらえるような教育でありたい。

グローバル化の実像

「グローバル化とは何か、そして、世界や日本はグローバル化しているのか、グローバル化するのがいいことなのか」近年、このような点について執筆をしている。

その結論としては、グローバル化を質的に定義することは結構難しいということである。国際化とどう異なるか、はたまた、EU や RCEP、あるいは一時大流行した TPP などとはグローバル化なのか、EU は欧州、RCEP はアジア、TPP は環太平洋となっている訳で、グローバル＝地球規模とはいわずらいところである。EU は EEC、EC などと言われた時代を含めると歴史も長くグローバル化の象徴のように言われる。確かに域内での国家的な動きが薄められた点は国際を飛び越えグローバルと考えていいがその分、域外に対しては排他的ですらある。

と言うことで、グローバル化は量的な拡大と見るほうが確実に捉えやすい。いわゆるヒトモノカネの伸長である。この中で、本学本学部で最も注目されているのが、人的交流であろう。これについては、紀要で詳述しているが、結論だけ書くとすると、外国人労働者、移民・難民、留学生はともかく、一時渡航者数（一時入国者数全体の内 1～2 割を占めるビジネス客も含めて観光よりも渡航者と呼んでおく。要するに住所のない滞在者である。）の動向は決してグローバル化を喧伝される時期と符合してい

ないことである。

まず、送り出しについてだが 21 世紀に入って LCC など大きな後押しがあるのにもかかわらず、ほぼ動きがないのはよく言われることで、統計もそれをサポートしている。まさに内向きのなぜか若者世代（だけではないのだが）のせいになっている。

そして、アウトバウンド以上によく注目されるのが、インバウンドである。こちらはそれこそ急速に伸びている。グローバル化の象徴とされたりする。しかし、実は、数字を時間軸で見た場合、グローバル化に伴って増えているとは言いがたい。コロナ禍直前の 3180 万人超だが、多少なりとも増加傾向が見え始めたのはむしろ東日本大震災以降の話、しかも、急激に伸びてきたのは 2015 年にやっと 1000 万人を超えてからである。それも円安傾向、入国規制ビザ緩和政策、VisitJAPAN キャンペーンなどが要因であり、地球規模のグローバル化と言われる時期が 1990 年代だとすれば、グローバル化とはかなりズレているというかわしる無関係と言っていい。

国別動向についても触れる。ざっくり言って大陸中国 25%、韓国 25%、香港台湾合わせて 25%、以下その他のアジア諸国も合わせて残り 25% である。アジア化であり、東アジア化、中国化、否、中華化とさえ言える状況である。浅草雷門で記念写真を撮る欧米人を見てグローバル化の象徴みたいに考えがちだが、むしろ特殊な例なのである。

もの（貿易、輸出入）については、さらにトレンドがグローバル化の時期と大きくズレている。よく指標とされる対 GDP 輸出比率（輸出総額を GDP 総額、ともに名目で割った値）であるが、グローバル化と言われる時期、この数字にほとんど変化は見ら

れない。世界でも日本でもである。（世界全体で 25% 前後、日本は輸出立国などと言われるが 12% に過ぎず、まさに内向き）2010 年近辺、リーマンショック後の世界経済回復期がスロートレードの時期と重なっているのが象徴的であろう。世界の GDP が伸びているのにものの貿易だけが停滞しているのである。要するに各国国内での経済成長が世界全体の急速な復活を支えていたのだ。輸出額については、そもそも実額ベースで大きな変化がなかった時期あるいは何か災害・戦争などの理由があるわけでもないのに減少している時期すらある。一体どこがグローバル化なのか。

従って、よく出てくる、グローバル化が進展する今日、などというフレーズは容易に使えないところなのである。

内なるグローバル化という観点

ここまで書いてきて、グローバル化の時期とも重なっているし、現状飽和化しているとも言えない、かつ、そのような将来予測もでている国際交流の分野がある。それが在日外国人数、そしてその比率の上昇である。現在、在日外国人は 322 万人弱、人口全体のほぼ 2.6% が外国人となっている。グローバル化と言われる時期を挟んで、この数は着実に伸びてきている。そして、冒頭に挙げた外国人数、そして外国人比率の予測である。40 年程度で 10% を越えてくる。外国人流入と言えば、当然欧米など先進地域が中心になってくるが、現在この数字に達しているのは大所ではドイツ、スペインくらいなもので、米国でも 6～7% 程度である。

グローバル化での人的交流は必須アイテム

要するに内なるグローバル化の進行である。そして、この人たちと私たちは付き合っていく。それこそ好むと好まざるとに関わらずである。当然皆老いる。来年度定年退官を迎える私のように経済的には社会の中で支えられる側になっていく。ヒトはその人生の中でほぼ半分弱はお役に立たない。今、日本に来るのはその前半の4分の1あたりを海外で形成してもらった人たちである。しかし後半4分の1はそうはいくまい。冷戦前の東ドイツのように年金生活者になったら西側に亡命が合法的に出来るなどと言った都合のよいシステムがあるわけではない。様々な権利も主張するようになる。否そうでなければならない。冒頭に挙げた推計は、もちろん、近年の増加数をそのまま直線に伸ばしただけの数値であり、そんな先まで日本が魅力的な国であるということ自体があり得ない話かもしれない。しかし、それはそれでまた憂慮すべき事態でもあろう。

郷に入っては郷に従えと言おうが、氣にくわなければ帰ってくれと言おうが結構だが、国籍ベースで10%、いわゆるルーツをたどればはるかにそれを凌ぐ外国からの人々たち。ドイツに住んでいる人々の内純粋なドイツ人は50%程度などと言われ、米国で新生児の内いわゆる白人は半数を切っている時代である。1990年代にはわずか1%にも満たなかった在日外国人の人たちが、震災、リーマンショック、コロナ禍を通り抜け2022年にはほぼ40人に1人という数になっている。日本社会も変わっていくことであろう。どうグローバルなコミュニケーションをとっていくのか。その学びの一端であってほしいと強く望むところである。

協働・共生を目指さないという考え方

経済が回らないという言い方はよくされる。だが私はそう思っていない。技能実習生の70%が違法な雇用をされていたり、国際シンジケートによって国際的な人権問題にさらされている数多の留学生アルバイトを中心とした資格外活動の外国人労働者がいるなど、問題が山積している中で受け入れ態勢も出来ていないのにグローバル化の名の下に供給側の要請に押し切られる形で拡充することが本当にいいのか、無責任ではないのかという指摘は常にある。そして一方で何時までも収まりそうにない言われない差別と人権侵害。

国内の雇用を守る、そして、これ以上国際社会から批判を浴びる問題を起こさない、むしろ、外国人が担っている仕事での賃金アップ、待遇改善をつとめ、それを通じて中長期的には経済構造、社会システムの高度化を図る。そのためにはむしろ外国人受け入れを止めてしまえばいいという主張は十分成り立つのである。

ささやかながら前向きな一つの提案

それでも協働し、共生を目指すというのなら、国内在住の人間と同様に生まれてから死ぬまで社会の中で過ごしてもらうことを考える、そのことが必要なのである。そのような考え方を身につけた、そのような経験を積んだ人材が大量に必要なことはほぼ目に見えている。国際化が喧伝されグローバル・コミュニケーション学部のような高等教育機関が乱立した。多くの若者の海外で様々な体験をさせることが推奨されてきた。しかし、今後はそれに加えて国内に受け入れた外国人材とどう交流していくのか、それが必要になっていくのは間違

いない。そこに力点を置いたグローバル教育が望まれることになる。

世界でも有数の先進国の大都市、その中でも学問・教育・研究の中心にあるキャンパスを拠点として外国人と交流することに活用しない手はない。もちろん語学も重要であるが、そもそも日本は日常生活から高等教育まで幅広い分野でほぼ日本語で済む社会である。これもしっかりつかんでおくポイントの一つであろう。

ここで交流の一例を紹介したい。たいした話ではない。本学のそれこそ空き時間に空き教室に留学生を中心とした外国人の人たちを招くのである。本学に直接関係ない人でも構わない。特別なテーマなど要らない。日本や祖国での体験を話してもらい感想を語り合うのである。実は今年度そのよ

うな催しをパイロット的に行ってみた。数人のゼミ生と日本在住の韓国人学生との座談会である。

私のゼミには毎年出自が異なる学生が入ってくる。その学生に1時限を任せそのような時間をとることもある。学外講師招聘よりもよほど濃密な時間を過ごせる。彼らはまさに異文化を背負って生きているのだから。

上手に廻せば費用も時間も労力も最低限で済む。本学部の中には海外に行きたいがコスト面でそれは無理という学生は相当多い。キャンパスという貴重な資源、国際交流、人的交流の拠点とするのにはこの上ない位置にある。有効活用したいものである。

(グローバル・コミュニケーション学部)

電子辞書のすすめ

松 本 純 一

「電子辞書のすすめ」という題で、小文をしたためてみることにした。別に誰から頼まれたわけでもなく、ましてや電子辞書メーカーの回し者ということでもない。ただ、現在大学で教員をしており、及ばずながら英語教師・英語学者・言語学者の端くれである私の立場からすると、こんな良いものを使わない手はないと痛感することが多いので、この文章を読んだ学生諸君のうちの何人かでも、「そんなに良いものなら使ってみようか」という気になってくれたら嬉しいと思い、執筆を思い立った次第である。「電子辞書のすすめ」というテーマで書き始めてはいるが、内容の一部は要するに「とにかく皆もっと辞書をひこう!」という趣旨になってもいい。

私が電子辞書というものを使うようになったのは、あまりはっきりとは覚えていないが、大学で専任教員として教鞭をとるようになった 1990 年代半ばころからだったと思う。最初に使い始めた電子辞書は、最近のものに比べれば画面は暗くて見えにくいし、収録されている辞書数は申し訳程度であったが、それでも紙の辞書を持って歩くよりはずっと便利で、良いもののができたものだ、と感激した記憶がある。その後、いくつかのメーカーのものを使い比べてみたり、数年ごとにめばしい新機種が出ると買い替えたりして、現在に至る。さすがに最初期のころ使っていた機種は、液晶画面

がうまく表示されなくなったりして使い物にならなくなったが、それ以降に入手した機種はすべて今でも現役で活躍している。

そんなわけで、私の自宅や研究室には何世代かにわたる電子辞書が棲息しているのであるが、私は通常、もっぱら自宅内や研究室の中で調べ物をするには最新機種を使うが、どこか出先に持っていくときや、教室の各授業に持っていくには旧めの機種を持ち歩くようにしている。授業に最新機種を持っていかないことには、主に三つの理由がある。一つ目の理由は、教室の現場では常に紛失・置き忘れや、チョークの粉などによる激しい汚れなどの可能性があり、消耗が早まることが予想されるためである。二つ目に、私は粗忽者であるため、ややもすると教室まで持っていく途中で電子辞書を床に落としたりする恐れがあるということがある。そのため私は購入した電子辞書はむき出しでは使わず、必ず何らかの専用カバー類をつけて持ち運ぶようにしているが、それでも何度か激しく落としたために壊してしまったものもある。さらに三つ目の理由として、これは私が結構重要なことだと思っているのだが、特に専門科目ではない語学の英語の授業にあまり最新の良いものを持っていくと、「先生は専門家でよい辞書を持っているのだからずるい」と思う学生が出てくることを避けるためである。そんな風に思う学生はめったにいない

こととは思いますが、念の為の予防線である。電子辞書にはこの後述べるように一応「プロフェッショナルモデル」などと呼ばれる機種も存在するが、理科系の実験機器や音楽の楽器などと比べれば、上位機種と入門機種の間にそれほど莫大な価格の差があるわけでもなく、相違はもっぱら入っている辞書の種類と数だけであって、個々の辞書の内容に違いがあるわけではない。つまり、辞書や文法書を使った語学の勉強というものは、他の分野に比べて、やる気さえあれば誰でもプロの教師と同じ条件でどんな勉強を進められるはずのものなのである。そのことについて身をもって教えたくて、私は敢えて教室ではあまり良すぎる辞書は使わないことにしている。そして、教室ではできるだけ学生の前で自分が辞書を引いている姿をみせ、「へえ、そうだったのか」とか「しまった、覚え違いをしていた」などと少し大げさに驚いたり感動したりしてみせるようにしている。

閑話休題。現在私が自宅や研究室で使っている電子辞書のメインは、2018年に発売されたカシオのプロフェッショナルモデルXD-Z20000と、2020年に発売された同じくカシオのプロフェッショナルモデルXD-SX20000とである。それ以前の10年間ほどは、それまでの機種に充分満足していて、あまり新しい機種に興味がなかった私であったが、XD-Z20000は、久しぶりの改訂版が出て評判になっていた『広辞苑』の第七版が早々に収録されていたことと、それ以前の電子辞書に収録されることが少なかった『研究社新英和大辞典』が収録され、これによって私が(甚だ勝手に)「日本の誇る四大英和大辞典」と呼んでいる『リーダーズ英和辞典(研究社)』『新英和大辞典(研

究社)』『ジーニアス英和大辞典(大修館書店)』『ランダムハウス英和大辞典(小学館)』のすべてが一台の辞書でひけるようになったために、俄然購入意欲を掻き立てられた。ちなみに『リーダーズ英和辞典』は、大辞典という名こそついていないが、収録語数や語義の豊富さの点では間違いなく大辞典クラスの辞書である。

上に挙げた「四大英和大辞典」のうち、研究社の『新英和大辞典』がそれまであまり積極的に電子辞書に採用されていなかった理由は明らかである。四大英和大辞典のうちで最も旧く、『リーダーズ英和辞典』よりも収録語数は少なく、『ジーニアス英和大辞典』や『ランダムハウス英和大辞典』に載っているような語法や文法の解説があまり充実していないからであろう。しかしながら、これはやはり専門の英語学者としての好事家的なレベルになってしまうのかもしれないが、語源の解説などに関しては『新英和大辞典』は他の英和辞典をはるかに凌駕している。よく、ネット上などで、『ジーニアス英和大辞典』と『ランダムハウス英和大辞典』は語源が詳しく載っているので便利といった評価が聞かれるようだが、その場合の便利というのは、英単語の語源について日本語で分かりやすく興味深く載せてくれているので、語源を利用して英単語の意味を覚えようとするときなどに便利、というような意味なのだと思う。特に『ジーニアス英和大辞典』の場合は、各語の見出しのすぐあとに日本語による明快な語源解説が載っているのも、確かに見やすく便利ではある。私も英単語の意味の記憶の助けにしようとする場合や、簡単に英単語同士の語源的関係を知ろうとする場合などは、迷わず『ジーニアス英和大辞典』や『ラン

ダムハウス英和大辞典』のほうをひく。しかしながらもう一度強調すると、語源について本格的・専門的に追究しようとする場合は、専門の語源辞典などを除けば今でも『新英和大辞典』に勝るものはない。

例として、英単語の中でもはるばるいくつもの言語を経て英語に入ってきたことで知られている「lilac（ライラック、リラ）」という語の語源を調べてみるとよい。『ジーニアス英和大辞典』には、この語の起源がサンスクリット語であることが、そして『ランダムハウス英和大辞典』には、この語が英語に入ってくるまでに経由した三つの言語名だけが示されている程度だが、『英和大辞典』では、この語が五つの言語を経由してきたことが、それぞれの言語の元の語形や関連語とともに詳細に示されている。この例だけにとっても、『新英和大辞典』の語源記述がいかに詳細で専門的なものであるかがわかるであろう。

さて、これまで長々と自分の使っている電子辞書、というよりは辞書の良し悪しのことを語ってきたが、それでは本論に戻って、これらの辞書を使用するのに電子辞書を利用するのがよいのか、という素朴だが当然の疑問に話を移そう。そのためには、電子辞書との比較として、①従来の紙の辞書と②スマートフォンやPCで使用する辞書とのメリットやデメリットを考えてみる必要があるだろう。具体的な比較の観点としては、携帯性・操作性の点と、コストパフォーマンスの点が挙げられるだろう。そして私は、今のところこれら三つの媒体のうち、やはり電子辞書に最もメリットがあると感じている。

先に挙げた XD-Z20000 や XD-SX20000 には、大小合わせておよそ 200 種類もの辞

書や書籍が収録されているが、それらすべてをあまり詳しく検討しても仕方がないので、ここでは私が英語教師・英語学者であるという点から、上記二機種に収録されている英和辞典の類だけを取り上げてみようと思う。上記二機種に収録されている、主な英和辞典としては、以下のようなものが挙げられる：『リーダーズ英和辞典（研究社）』『新英和大辞典（研究社）』『ジーニアス英和大辞典（大修館書店）』『ランダムハウス英和大辞典（小学館）』『ジーニアス英和辞典（大修館書店）』『ウィズダム英和辞典（三省堂）』『オーレックス英和辞典（旺文社）』。これらのうち前半の四種は、先にも述べた「四大英和大辞典」である。後半の三種については、現在英語教師や英語学者の間で、文法や語法に詳しいことで定評のある学習用英和辞典である。大辞典が入っているなら学習用英和辞典は必要ないのではという意見も聞こえてきそうだが、収録語数の多さと文法語法解説の詳しさは全く別のことであり、後者に関しては学習用英和辞典のほうのはるかにすぐれていることが多い。

それでは、上記七種類の英和辞典を例にとって、まず携帯性・操作性の点について考えてみよう。紙の書籍の形でこれらの辞書を使うことと比較した場合、電子辞書の優位性はほぼ明らかである。これらの辞書七種類を日常的に持ち歩くことなどまず不可能であるし、学習用辞典のほうはともかく、大辞典のほうはどれか一冊だけでも持ち歩くのは困難である。もっとも、私が大学院生だったころは、特に文学が専門の院生たちはこぞって『リーダーズ英和辞典』を持ち歩いていたものだが。また、自宅やあるいは図書館のレファレンスコーナーなどで利用するにしても、二冊以上の辞書を

交互に引き比べたいなどということになった場合、かなりのスペースと肉体的負担を必要とすることであろう。ただし、よく指摘されるように、紙の辞書の場合、開いたページ全体を見渡すことで、その語に関する様々な情報を一覧できる、前後の関連する語も一緒に一瞥できるなどの利点もあることは確かである。

次に、スマートフォンやPCとの比較である。よく電車の中などで、タブレットPCやノートPCを取り出して仕事をしているビジネスマンを見かける。そのように日頃からPCを持ち歩いている人であれば、その中に辞書も入れておくことも良いであろう。しかしながら、もっぱら辞書を使うためだけにPCを持ち歩くというのは、いささか難儀な話である。

そうすると、特に学生にとって現実的なのは、スマートフォンで辞書を使用するという選択肢になるわけであるが、私はこれはいささか危険だと思っている。スマートフォンにちゃんと上記のような辞書のアプリ版をインストールして使用するなら、電子辞書と同じようなものになり、それほど問題はないであろう。私自身も将来的にはその方向に進む可能性も大いにある。しかし、スマートフォンをこのような状態にして快適に使用するには、かなりの手間と費用、そしてスマートフォンの記憶容量などに相当な余裕を必要とする。それが厄介なので、結局学生たちの多くは、無料の辞書サイトや単なるネット検索で代用しようとしてしまう。ネット検索は、常に最新の情報が得られやすいなど、評価すべき点もあるが、やはり匿名性が高いために、無責任な情報や不完全な記述がまかり通ってしまうという危険が伴う。何より、もしも調べ

た内容をレポートや論文などに取り込もうとした場合、正確な出典を明示しにくいという問題がある。さらに、私自身が使ってみた感想から言っても、スマートフォンの縦長の画面は、電子辞書の横広の画面と比較して、少なくとも英語のような横書きの言語に関しては視認性が劣るようにも感じる。

次に、コストパフォーマンスの問題に移ろう。以後、電子辞書や書籍の価格は、2023年8月時点でのAmazon.co.jpでの価格を参考にする。カシオのプロフェッショナルモデルは、新発売の時点で約七万円、一年経過した時点で約五万円、五年ほど経過してまだ在庫が残っていれば約三万円で入手できる。やはり結構な値段ではないかと思われるかもしれない。しかし、先に挙げた七種類の英和辞典を紙の書籍で買い揃えると、七万五千元ほどとなり、これだけで新品の電子辞書一台の価格になってしまうのである。スマートフォンのアプリでそろえた場合は、紙媒体よりはいくらか安くなるようだが、それでも同じ七種類を揃えたとしたら少なくとも五万円程度にはなるようである。ここではあくまで英和辞典七種類のみの価格で比較しているのであって、電子辞書にはその他に和英辞典数種類・英英辞典数種類・英語類語辞典・英語連語辞典・国語辞典数種類・日本語類語辞典・日本語アクセント辞典・古語辞典・漢和辞典・百科事典数種類・英文法書なども入っているのだから、やはり電子辞書が一番リーズナブルであるのは明らかである。さらにスマホアプリの場合は、Android系かiPhone系かによって、使える辞書の種類に制限があったりするようである。

ここで少し脱線して英文法書について述

べておくと、カシオの上位機種にはかなり以前から英文法書として旺文社の『ロイヤル英文法』が収録されているのだが、これがまた誠に絶妙な選択と言える。これ以上基礎的な英文法書では大学生や社会人には物足りないだろうし、これ以上詳しいものは専門家以外の人にとっては専門的すぎるだろう。どのような経緯で『ロイヤル英文法』に決まったのかはわからないが、結果として実にうまい選択をしたものである。

さて、これまでの話で、電子辞書の優位性がお分かりいただけたものと思う。それでは、もし電子辞書を買ってみようかという気になった人がいたとして、どのような機種を選ぶべきなのであろうか。結論を言ってしまうと、私なら迷わず、できるだけ上位機種を買うことをお奨めする。予算の都合があるなら、最新機種ではなくても、三年位前のものでも充分である。ここでもご紹介した、プロフェッショナルモデルと呼ばれる種類のものを購入すべきである。上述の内容からもお分かりのように、上位機種だからといって大辞典しか入っていないわけではなく、ちゃんと学習用辞典も入っている。下位の機種を使っている物足りなくなるということはあっても、上位の機種を買ってしまったからオーバースペックで使いこなせないということはないのである。

現在は以前に比べて、電子辞書から撤退してしまったメーカーも多い。現在新品の電子辞書を発売し続けているのはカシオとシャープだけである。シャープのほうもカシオとは一味違ってなかなか使いやすいようではあるが、シャープは最上位機種が高校生用モデルになっていて、英語系辞書の収録内容にかなり不満が残るので、上記のような理由で私は他人に奨めるならカシオ

一択である。

よく、入学祝いなどにお子さんやご親戚に電子辞書を買িয়ে与えようとしたり、どんな機種がよいか相談されたりして、「まだ高校生だからこの程度の機種で充分」というような判断をする人がいるようだが、たいていは後悔の元である。電子辞書は、よほど手荒な使い方をしない限り、軽く10年以上はもつ道具である。その辞書を使う人が、今はまだ高校生であるとしても、大学生や社会人になってからも同じものをそのまま使い続けることができたほうがよいに決まっているのではないか。電子辞書ほど、安物買いの銭失いの好例はないのである。大学生や社会人になればPCやスマホを使うようになるから、電子辞書はあまり必要ないという意見も聞かれるようだが、専門や仕事の内容にもよるが私としては大学生や社会人こそ電子辞書をフルに活用してほしいと思っている。

最後に、いささかマニアックな話にはなるが、私が電子辞書を使っていて最高の贅沢として堪能している使い方をご紹介しよう。それは、同じ語をいくつもの辞書で引き比べることや、さらには同じ辞書の異なる版を引き比べるという使い方である。もっともこれは電子辞書でなければできないという訳ではないが、最近の電子辞書の基本的な使い方は、特定の辞書を選択してその中を検索するというのではなく、まず一般的な検索窓に英語なり日本語なりを打ち込んでしまえば、その機械に入っているすべての辞書を横断してその語を検索してくれるという方法がむしろ普通である。これは、語法や例文を比較検討したい場合などには本当に便利な機能である。

先に紹介した機種のうち、特にXD-

SX20000 のほうは、内部にかなりの空き記憶容量があって、メーカーのサイトから追加コンテンツをダウンロードすることができる。私はドイツ語・イタリア語・フランス語・スペイン語といった他の西欧語の辞書を追加しているが、その他に、この機種が発売になった後に出版された、『ジーニアス英和辞典』の新しい版（第6版）を追加した。これによって、一台の電子辞書の中で『ジーニアス英和辞典』の第5版と第6版を引き比べ、新語の追加や語法解説

の変化などを比較することができるようになった。これは私のような英語学者にとっては興味の尽きない知的快楽である。ちなみに、XD-SX20000 の後継機種である XD-SX21000 には、もともと第6版のほう収録されているため、新旧の版の引き比べというのはかえってやりにくくなってしまっている。

さあ、皆さん、ぜひ電子辞書を活用して、英語やその他の言語を大いに楽しんで学びましょう！

（グローバル・コミュニケーション学部）

『研究室だより』編集委員会

委員長	対馬	宏		
委員	赤尾	充哉		
	飯田	明日美	坊	隆史
	松本	純一	李	新建

表紙写真 正面玄関 フェニックスモザイク

■『研究室だより』 No. 55

■発行・2024 年 3 月 1 日

■編集兼発行人・愛知 太郎

■発行所・東京都文京区本郷 1-26-3

学校法人 東洋学園 TEL 03(3811)1696

■印刷所・(株)光洋社 TEL 03(6302)1645